

第4節 前田東・中村遺跡出土の木製模造品をめぐる二、三の問題

—— 斎串を中心に ——

(1) はじめに

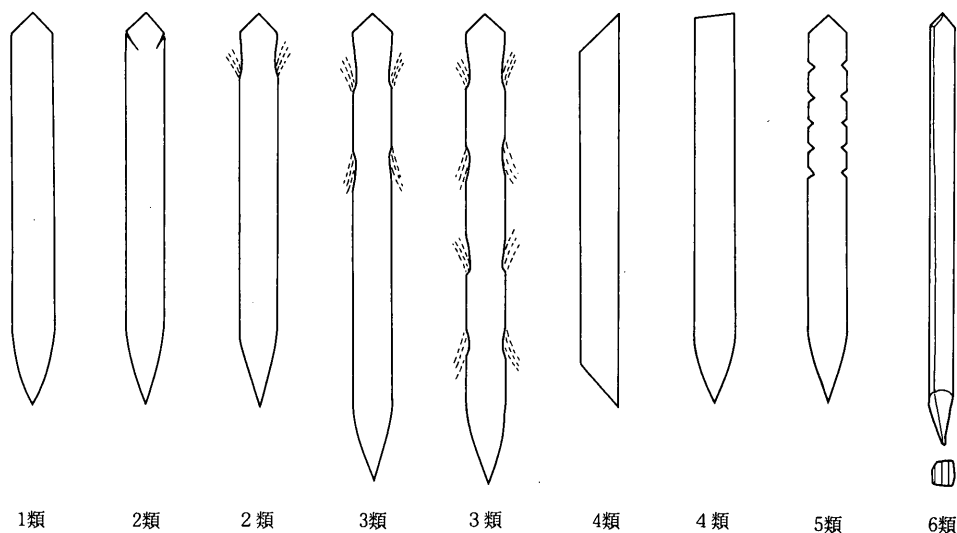
前田東・中村遺跡のG区S R04の上層から古代の木製品が多量に出土した。出土した木製品の大多数を占めるものは斎串・人形・刀形といったいわゆる木製模造品と言われるもので、祭祀具と考えられているものである。木製模造品には人形・馬形・刀形・鳥形・舟形・鏃形・斎串などが主にあげられ、平城京をはじめとする宮都や官衙などから出土することが多い。香川県でも近年の発掘調査の増加とともにこうした木製模造品も出土するようになっている。こうした状況の中で前田東・中村遺跡出土の木製模造品はG区S R04出土のもので人形が5点、刀形が2点、斎串が確実なもので170点余り出土している。さらにE区S E02とF区S X02でも斎串が少量出土している。このように前田東・中村遺跡の木製模造品は圧倒的多数が斎串で占められている。そこで本稿では斎串を中心に、その形態的な問題、用途などを検討してみたい。また斎串はいわゆる形代として模造したものと厳密には異なるといえるが、これらと非常に関係が深い遺物として木製模造品に含めることにする。

(2) 前田東・中村遺跡出土の斎串

前田東・中村遺跡からは確実なもので170点余りが出土しているが、主に上端部の形態を主要因、側縁部の形態を副次的要因として7つに分類した。

- 1類：上端部は圭頭状で、側縁部に切り掛けを施さないもの。
- 2類：上端部は圭頭状で、側縁部に切り掛けを1対施すもの。
- 3類：上端部は圭頭状で、側縁部に切り掛けを2対以上施すもの。
- 4類：上端部を斜めに切り落とすか、僅かに切り落とし平坦に近くなっているもの。
- 5類：側縁部に抉って加工した切り欠きを施すもの。
- 6類：断面形が方形で棒状のもので、上端部は圭頭状あるいは斜めになるもの。
- 7類：その他のもの。

下端部は6類が鉛筆の芯先状に加工するものが多い他は、剣先状になるものが大多数であ

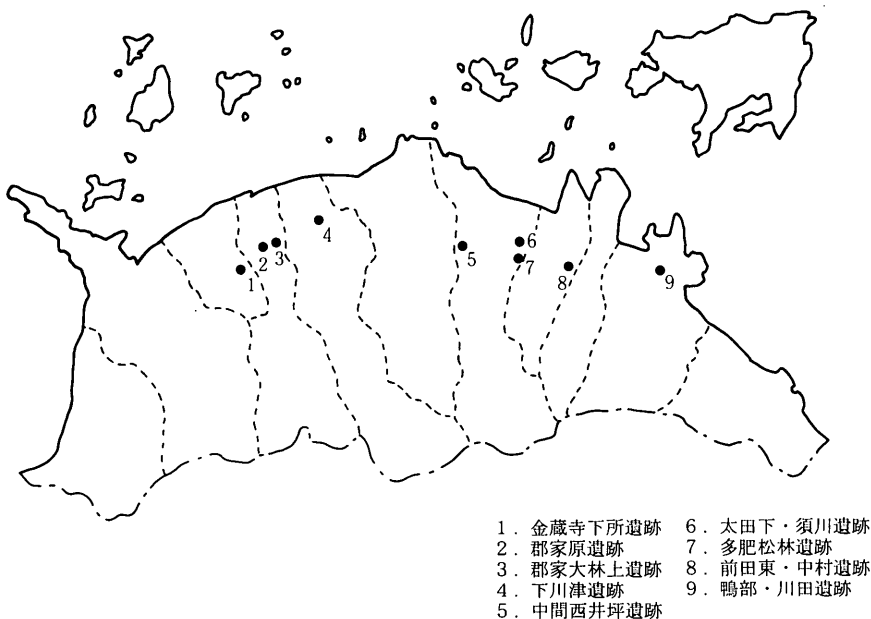


第817図 前田東・中村遺跡出土斎串形態分類図

る。

各類型ごとにその大きさを見ると、全体が判明しているものの全長の平均であるが、1類の平均は20.4cm、2類の平均は20.7cm、3類の平均は26.8cm、4類の平均は18.5cm、5類は該当資料なし、6類の平均は32.1cm、7類の平均は26.6cmである。このうち7類はその他の形態のもので様々なものを含むので、1～6類のそれぞれの形態的特徴によってまとめたグループのデータとは意味合いが異なるものとなっている。このことから分かることは、上端部が圭頭状で下端部が剣先状になることは共通し、側縁部の切り掛けによって分類した1～3類のものでは、切り掛けを施さないものから多数切り掛けを施すもの、つまり1類→2類→3類の順に長くなっていることがわかる。3類は側縁部に切り掛けを施す部分が多くなるため必然的に長くなっているものである。1類のものに切り掛けを1対施せば2類となるので、1類と2類の差があまりないことも理解出来る。また6類のものが突出して長くなっているが、1～5類のものが薄い板材を使用しているのに対し、6類のみが異なる棒状のものをしていることから異質な斎串と言えよう。

次に各類型ごとの出土量を見ると、1類が12点、2類が15点、3類が27点、4類が10点、5類が1点、6類が38点、7類が11点となっている。また部分的な破片のためどの類になるかは不明であるが1～5・7類のいずれかに入るものが60点となっている。ここから分かることは同系統の1～3類では3類が最も多く、さらに異質な6類が多いということ



第818図 香川県内木製模造品出土遺跡分布図

である。しかしこの6類の38点の中には下端部のみのものが含まれるが、これは6類のものが棒状のもので他の類のものと区別出来るからである。6類以外で判断が出来なかった60点がそれぞれの類に分散したとしても6類が多いことに変わりはないと言える。つまり前田東・中村遺跡出土の斎串は3類と6類という長めのものが特徴的となっている。

斎串を中心とした木製模造品の年代であるが、多量の斎串が出土したG区SR04の上層は6～14世紀の時期幅があるが出土土器はあまり多くないが、7～9世紀が主体となっている。

(3) 斎串を中心とした木製模造品の諸例

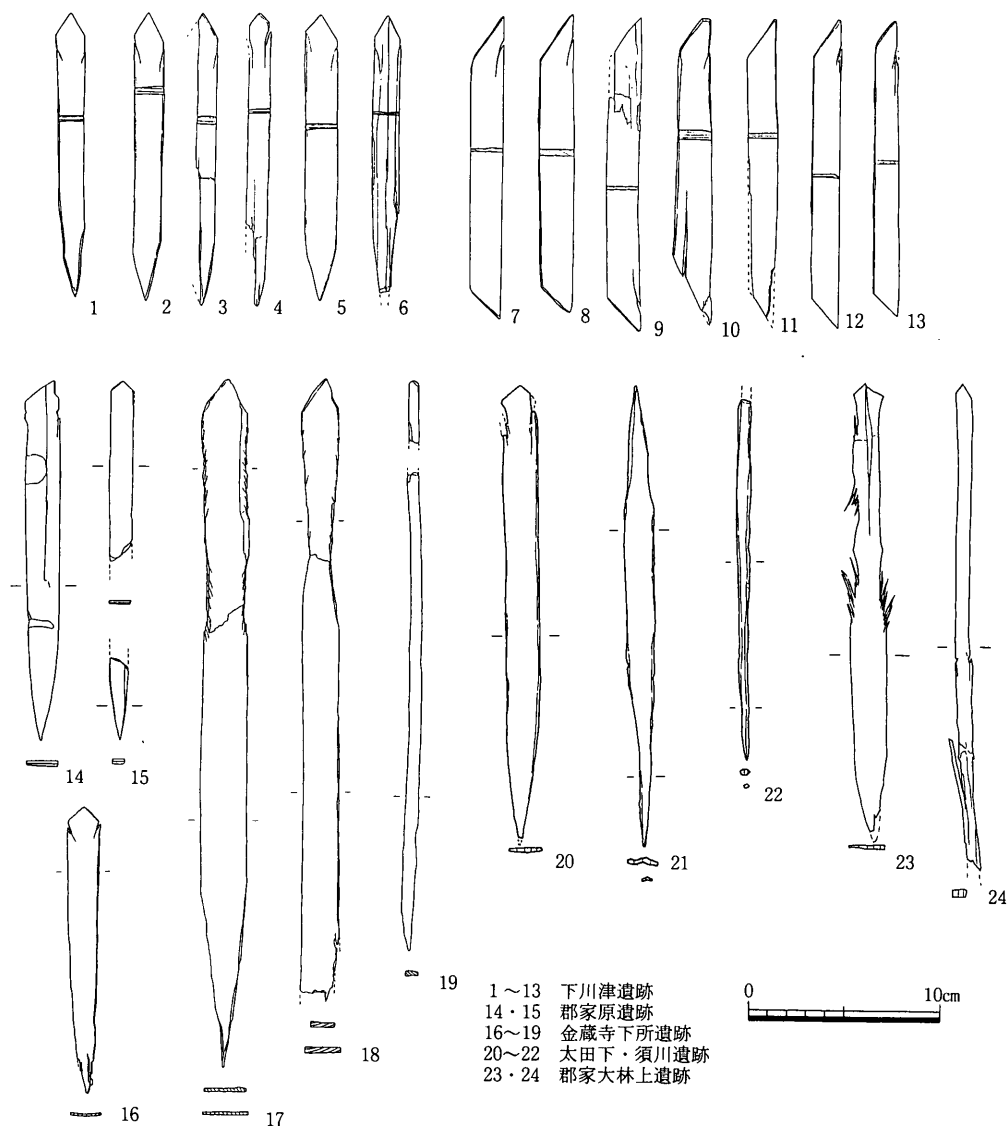
香川県で斎串をはじめ木製模造品が出土した遺跡は、前田東・中村遺跡を含めてこれまで9例が知られている。その各遺跡を概観してみることにする。

坂出市下川津遺跡⁽¹⁾

丸亀平野東部の大束川下流域の東岸部に位置する弥生時代前期～室町時代にかけての遺跡である。遺跡は4つの微高地とその周辺部の旧河道を中心とする4つの低地帯からなっている。下川津遺跡は旧鶴足郡に位置し、特に遺跡付近の川津郷は天平勝宝4（752）年

に東大寺の封戸となっている。古代では7～11世紀まで多数の建物が見られる。特に7世紀では遺跡北部の第1微高地と南部の第4微高地で大型の建物が集中している。木製模造品はこれら微高地の東側の旧河道から出土している。斎串が154点、人形51点、舟形10点、鳥形1点、刀子形3点、馬形5点、陽物形1点の合計225点が出土している。

出土した斎串の形態は先の分類に当てはめると、1・2・3・4類のものが出土している。2類のものでは上端部の圭頭部分直下に短い切り込み状に切り掛けを施すものが多く50点ほど出土している。4類のものでは両端部を斜めに切り落とし台形状になるものが15



第819図 香川県内出土斎串（1／4）

点出土しており、前田東・中村遺跡ではこのタイプのものが確実なものでは1点しか出土していない。下川津遺跡の斎串は全長15～17cmの小型のものが圧倒的に多く、20cmを超えるものは20点程度で全体の15%にも満たない。

斎串に次いで出土が多かった人形は頭部が圭頭状になるものが多い。脚部を表現しているものは少なく、多くは斎串と同様に剣先状になっている。全体に50cmを超える長大なものが多く側縁部の2箇所には切り欠きを施し肩と腰を表現している。顔には墨書で簡単に眉・目・鼻・口を表現している。肩部は怒り肩のものが多いが、若干撫で肩のものも含まれる。

木製模造品は微高地の東側の低地帯から集中的に出土している。7世紀代の第1低地帯流路2・3・5，8世紀代の第3低地帯流路2，9世紀代の第2低地帯流路2からそれぞれ出土している。特に第2低地帯流路2では斎串15点と人形34点が集中して出土し、報告では斎串と人形の使用時の様相と使用単位を留めていると考えている。これら木製模造品はいずれも大型掘立柱建物群を検出した微高地の東側の低地帯から出土している。報告で下川津遺跡の古代の遺構群は有力首長の居宅あるいは公的施設を想定しているが、木製模造品を出土した低地帯の流路はこれらの祓所の可能性もある。

普通寺市金蔵寺下所遺跡⁽²⁾

丸亀平野の南西部の金倉川西岸に位置する弥生・奈良・平安・鎌倉時代の遺跡である。微高地上に奈良時代と平安時代の掘立柱建物と溝が形成されている。建物は総柱建物を伴うが、特に大型のものはない。そしてこの微高地を取り巻くように旧河道があり、この旧河道から木製模造品が出土している。木製模造品は斎串100点以上、人形3点、馬形2点、舟形7点、刀形2点が出土している。木製模造品とともに赤色顔料を塗った土師器が数点出土している。

出土した斎串は前田東・中村遺跡の分類で2類と3類が多い。2類のものは上端部の肩部に1回の切り掛けを1対施すが、全長15cm以下のものと20～30cmの大きなものの2タイプがある。3類とした切り掛けが2対あるものは、斎串全体の上半分に施され30cmを超える長大なものである。しかし切り掛けを4対施すものはない。前田東・中村遺跡で6類とした断面方形の棒状の斎串も2点以上含まれる。斎串は全体的に長いものが多くなっている。人形は3点であるが下半部は欠損しており足の有無は不明である。胴部の上位に切込みを入れ、頭部に切込みを入れ被りものを表現するもの1点、胴部の上位に切込みのみを施すもの1点、全く胴を表現しないもの1点となっている。また顔は3点とも墨書され、

肩は怒り肩に切り込まれている。これらの木製模造品は共伴した土器により 8 世紀後半と考えられている。

丸亀市郡家原遺跡⁽³⁾

丸亀平野の中央部の平地に位置する弥生時代～鎌倉時代・江戸時代の遺跡である。奈良時代では掘立柱建物群が 3 群検出された。平安時代では遺跡の西部で出水状遺構からそのままつながる溝が掘削され、この溝の東西に掘立柱建物が散在するが、3 間×1 間の 4 面廂付きの建物が 1 棟ある。この溝は 8, 9, 13 世紀代の 3 層に大別されている。この溝の 9 世紀代の層から、墨書土器を含む須恵器・土師器、緑釉陶器とともに斎串が 4 点出土している。

斎串のうち全体の判明しているものは 1 点で、上端部を斜めに切り落とし下端部は剣先状で、上端部のやや下に小さい切り込みを 1 対施している。全長は 18.8cm である。その他に上端部が圭頭状になるが切り掛けが認められないものと、下端部の剣先状になっている部分のものがある。木製模造品の出土は斎串のみであった。

高松市太田下・須川遺跡⁽⁴⁾

高松平野の中央部の平地部に位置する弥生時代～平安時代の遺跡である。調査区の西側の平安時代の旧河道から斎串が 13 点、人形が 3 点出土している。斎串は形状が分かるもので上端部が圭頭状で下端部を剣先状にするもので、切り掛けを入れないものと 1 対入れるものがある。また圭頭状の上端部のすぐ下に小さい三角形の切り欠きをいれるもの、断面が方形の棒状のものも含まれている。さらに両端を剣先状にするものも 1 点出土している。前田東・中村遺跡の 1・2・5・6・7 類にそれぞれ相当する。

丸亀市郡家大林上遺跡⁽⁵⁾

丸亀平野の中央部の平地に位置し、郡家原遺跡の東約 600m にある弥生時代～近世の遺跡である。調査区の最も西側の旧河道の古墳時代～平安時代の層から斎串が 2 点出土している。上端部を圭頭状にして側縁に加工を加えないものと、上端部を圭頭状にし側縁部に切り掛けを 4 対施すものである。前田東・中村遺跡の 1 類と 3 類にそれぞれ相当する。

高松市中間西井坪遺跡⁽⁶⁾

高松平野の南西部の六ツ目山の東麓から派生する扇状地の扇端部に位置する旧石器～近世にかけての遺跡である。調査区の東半部で検出した旧河道から平安時代初頭と考えられる人形が 1 点と斎串と思われるものが 1 点出土している。このうち人形は頭部を圭頭状にし下部は切り込みを入れて足を作り出しているが足は短いものである。頭部・胴部・手は

全く表現されていない長大なものである。

大川郡志度町鴨部・川田遺跡⁽⁷⁾

鴨部川沿いに広がる平野部の東岸部に位置する弥生時代・平安時代の遺跡である。鴨部川の堤防のすぐ東に隣接した調査区で旧河道の一部を検出した。旧河道の岸に近い所で斎串が数点出土した。斎串は上端部を圭頭状にし、上部に三角形の切り込みを1～2対施すものである。前田東・中村遺跡の5類に相当する。

高松市多肥松林遺跡⁽⁸⁾

高松平野の中央やや南側の平地部に位置する弥生時代・平安時代・室町時代の遺跡である。平安時代前半期の旧河道から斎串が十数点出土している。斎串の形態は上端部が圭頭状で下端部が剣先状になるものが大多数で、切り掛けを1対施す前田東・中村遺跡の2類に相当するものである。

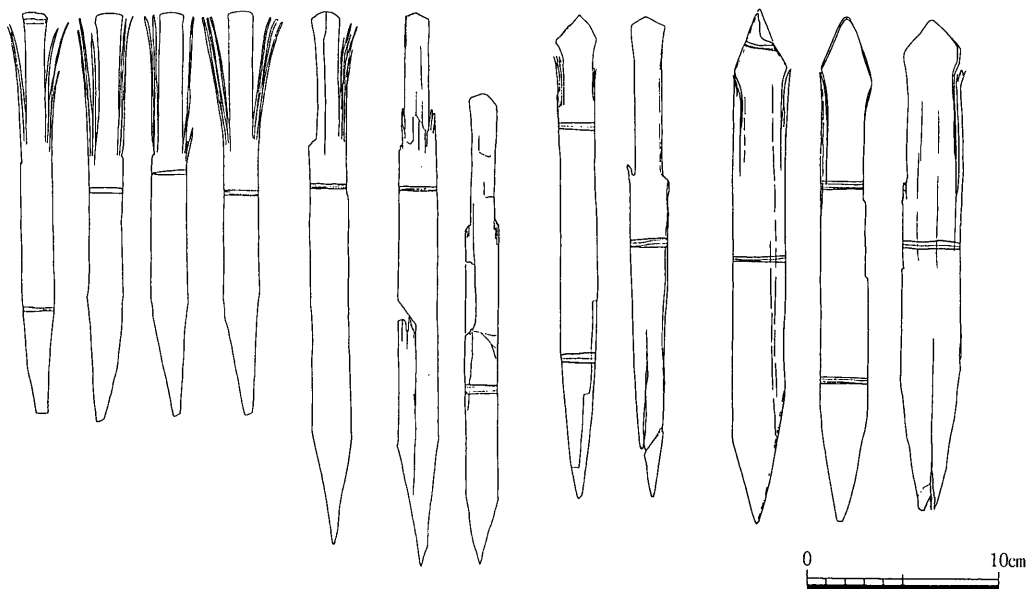
以上、香川県内で現段階で斎串を中心とした木製模造品の出土例を簡単に紹介したが、この中にはまだ未整理段階のものも含まれており、さらに今後の発掘調査により資料が増加するものと思われる。

(4) 斎串の形態

前田東・中村遺跡では斎串を7形態に分類した。この分類に先に紹介した8遺跡の斎串を当てはめると、下川津遺跡では1～4類が、金蔵寺下所遺跡では2・3・6類が、郡家原遺跡では4類が、郡家大林上遺跡では1・3類が、鴨部・川田遺跡では5類のものがそれぞれ出土している。以下、1～7類を用いるときは前田東・中村遺跡出土斎串の分類を指す。

斎串の長さに注目してみると先に検討した前田東・中村遺跡出土の斎串では、同系等の1～3類では切り掛けを施した部位が増えるほど、つまり1類→3類の順に長大化している。下川津遺跡では20cmを超えるものは20点で全体の15%にすぎないが、このうちの10点は3類に相当する。金蔵寺下所遺跡では2類のものは全長15cm以下のものと20～30cmのものがあるが、3類のものは30cmを超える長大なものがほとんどである。下川津遺跡や金蔵寺下所遺跡でも前田東・中村遺跡と同様の傾向が見られる。これに対して4類としたものでは下川津遺跡、郡家原遺跡、前田東・中村遺跡で出土しているが、いずれも20cm未満のものである。

これまで香川県内の諸例を検討してきたが、その比較のために他地域の出土例について



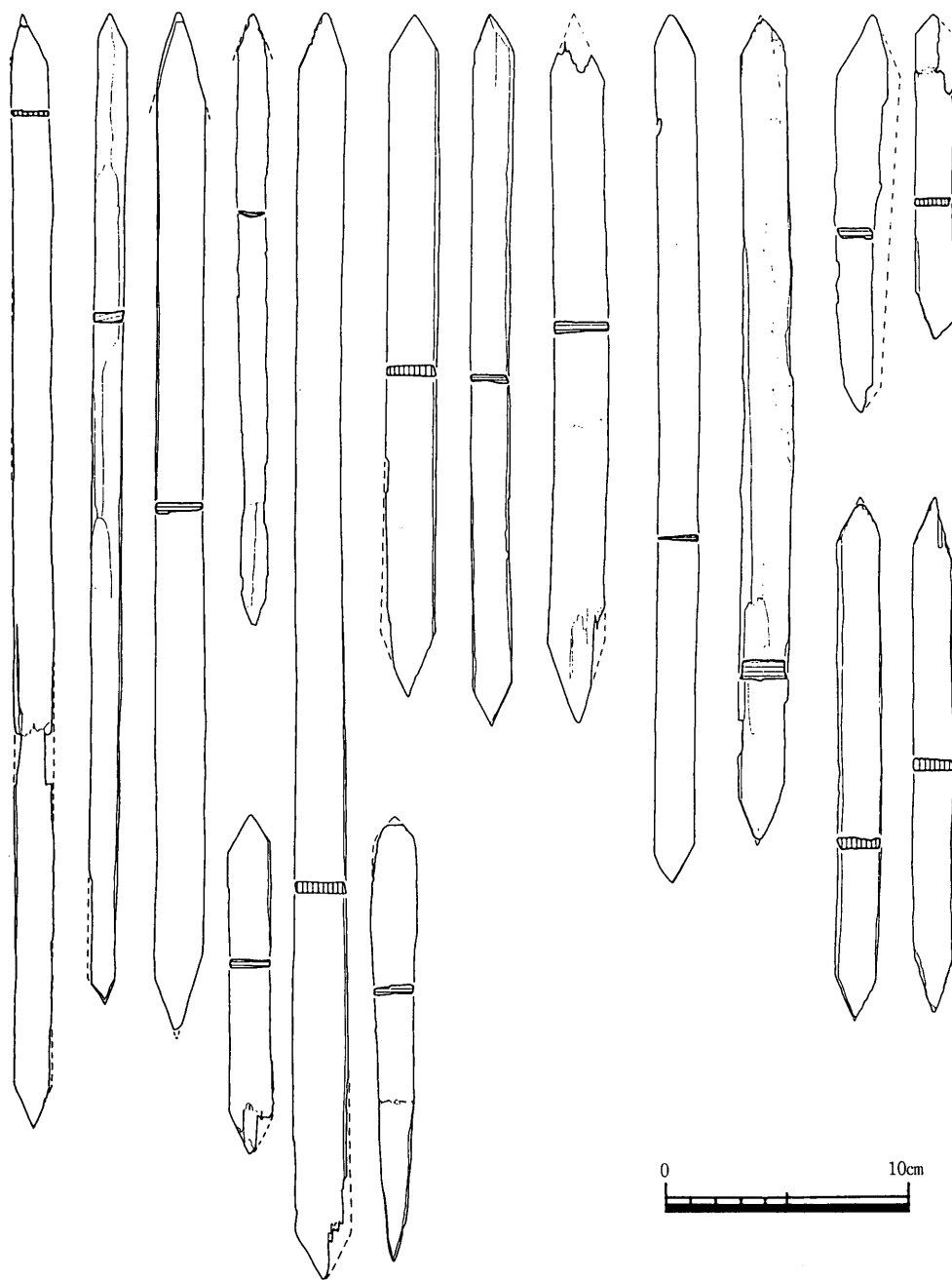
第820図 杉垣内遺跡出土斎串（1／4）

若干検討してみよう。

斎串は律令制祭祀の成立とともに出現したものと言えるが、その律令制の中心となる平城京・長岡京・平安京などの宮都から多く出土している。また地方においては国衙などの公的施設などから出土している。

奈良国立文化財研究所では近畿地方の古代の木器を集成し、『木器集成図録』として刊行している⁽⁹⁾。この中に斎串をはじめとする木製模造品も祭祀具として含まれている。この中で斎串は両端の形状によりA～Dの4型式に、側面の切り込みの方法により8式に分類している。これによるとA型式は板材の両端を斜めに切り落としたもので、4類に相当する。両端を圭頭状につくるB型式は前田東・中村遺跡にはない。上端部を圭頭状につくり、下端部を剣先状にするC型式は1～3類に相当する。これは切り込みにより細分され、CⅠ型式が1類、CⅢ・Ⅳ型式が2類、CⅤ型式が3類となる。また側縁を三角形に切り欠くCⅥ型式は5類に相当する。これら以外のものはD型式としている。C型式が展開する8世紀の平城京では14～23cmの長さの斎串が一般的であるという。

三重県松阪市杉垣内遺跡⁽¹⁰⁾では井戸から斎串と人形が、旧河道からは斎串・人形・馬形・刀形とともに農具・容器などが出土している。報告では先の『木器集成図録』の分類に準拠している。8世紀末～9世紀の井戸の資料では、S E23からは斎串は5点出土しておりB型式としているものが3点出土しているが、C型式に非常に似ており2類に相当する。



第821図 神明原・元宮川遺跡出土斎串（1／3）

長さの平均は26.0cmである。S E 24からは斎串が14点、人形が2点出土している。斎串はCⅢ型式とBⅢ型式があり2類に相当する。長さの平均は20.9cmである。また井戸出土の斎串は上端部の圭頭状のつくりが非常に弱く4類に近い。弥生時代～平安時代の旧河道からは斎串が169点出土しており、2・4・5類が出土している。2類の長さの平均は27.1cmであるが、この他に平均16.9cmの1群が2点ある。

静岡市神明原・元宮川遺跡⁽¹¹⁾では大谷川の旧河道を検出した。ここから古墳時代後期～平安時代の膨大な祭祀遺物が出土した。奈良時代・平安時代の木製模造品では斎串200点以上、人形74点、舟形3点、刀形が22点出土している。報告では斎串を独自にA～Gに分類している。1・4・5類の他に両端が剣先状になるもの、両端が圭頭状になるもの、卒塔婆状のものがある。そしてこの遺跡出土の斎串には基本的に切り掛けが施されず、切り掛けが認められるものは僅か3点である。1類に相当するものの長さの平均は24.4cmである。また上端部を斜めに切り落とす4類に相当するものの平均は19.2cmである。その他に報告で箸状木製品としているものが35点ほど出土している。長さが18～25cmで幅0.5～1.0cmの棒状のもので両先端が細く尖っている。断面は方形である。斎串の可能性を指摘しているが、これらの中には上端部が圭頭状に近いものも含まれている。斎串であれば6類に相当する。

簡単に数例の斎串を検討したにすぎないが、上端部を圭頭状にして下端部を剣先状にするものが斎串の最も一般的な形態といえる。前田東・中村遺跡でいえば1～3類、『木器集成図録』のC型式である。この中でも切り掛けを1対施す2類が多くなっている。また切り掛けを2対以上施す3類が前田東・中村遺跡では27点あり確実に型式の分かるものの中で全体の24%を占めている。前田東・中村遺跡では3類の中でも切り掛けを4対施すものも10点ほどある。この3類は香川県内では金蔵寺下所遺跡で確実なもので9点出土している。郡家大林上遺跡でも切り掛けを4対施すものが出土している。切り掛けを4対施すものは他地域では平城京東三坊大路の東側溝S D 650⁽¹²⁾、平安京左京四条一坊⁽¹³⁾などから出土しているが全体に少量である。切り掛けの多さから必然的に25cmを超える長いものが多いになっている。逆に長いから切り掛けを多く施したのかもしれない。

次に一般的な薄板を使用したものと異なり、6類とした棒状の斎串が前田東・中村遺跡では38点出土しており、全体の22%を占めている。神明原・元宮川遺跡の箸状木製品や他の遺跡で箸状木製品や棒状木製品としているものの中に、斎串として良いものも含まれている可能性が高い。前田東・中村遺跡のものは上端部が圭頭状あるいは斜めに切り落とさ

れ、下端部は鉛筆の芯先状の鋭く削っており明らかに斎串と言える。しかし切り掛けを施したものは少ない。他の遺跡では香川県内では金蔵寺下所遺跡で出土している。平城宮馬寮の井戸⁽¹⁴⁾、平城京左京五条五坊⁽¹⁵⁾でも出土しているがまだ類例は少ない。長さは前田東・中村遺跡のもので30cmを超える長いものが多い。

側縁に三角形の切り欠きをいれる5類のものは前田東・中村遺跡では1点のみで、香川県内では現段階で金蔵寺下所遺跡、郡家原遺跡、太田下・須川遺跡、鴨部・川田遺跡で僅かに出土しているにすぎない。

（5）斎串の年代

斎串は旧河道から出土することが多く、旧河道の性格からその年代を決めにくい状況にある。しかし中には井戸から出土する例から時期幅を限定出来る例もある。現在斎串の初現と考えられているものは、奈良県和爾遺跡⁽¹⁶⁾の井戸から出土したもので6世紀後半と考えられているものである。『木器集成図録』によると近畿地方出土の斎串はA型式が6世紀後半に出現し、B型式とC型式の一部が7世紀後半に出現し、8・9世紀にはC型式のものが展開するという。また黒崎直氏による斎串の先駆的研究⁽¹⁷⁾によると、切り掛けを施さないものと簡単に一对の切り掛けを施すものが6世紀代に出現し、7世紀後半に切り掛けを二対施すものが出現するという。そして8世紀後半には代表的なものが出揃う。8世紀末以降は切り掛けを4対以上施すもの、三角形の切り欠きを入れるものが増加し、それまでのものは減少する。そして棒状の斎串が最も遅れて出現するとしている。両者とも時代が下るとともに単純なものから切り掛けを多く施した長いものが出現するとしている。しかし先に出現したものと入れ替わるものではなく、9世紀前半の平城京東三坊大路東側溝SD650でみられるように先行して出現したものも残っている。時代とともに大きさの区別がされてきたようである。

前田東・中村遺跡の斎串は7～9世紀が主体となる旧河道から出土しているが、三角形の切り欠きを施す5類以外は基本的に揃っている。下川津遺跡では7世紀代が主体となる旧河道から出土しているが、量的には1・2・4類が多く、15～17cmの小型のものが全体の75%近くにのぼっている。しかし3類のものも5点ほどであるが7世紀後半に出現している。金蔵寺下所遺跡は2・3・6類のものがあり、3類のものは30cmを超えている。8世紀後半の旧河道からの出土である。郡家原遺跡のものは4類と5類の両方の特徴を持っているものであるが、18.8cmのもので9世紀代のものである。香川県内でも7世紀代には

まだ1・2・4類が主体となっているが、8世紀後半には3・6類が加わっている。

前田東・中村遺跡では7～9世紀の時期幅がある。しかし中には14点が折り重なって出土していることから一括して廃棄されたと考えられる一群がある。G区の955・966・968・969・970の3類、985・986・989・992・994の6類、6類に近い7類の1027、下端部のみの1057・1062、胴部のみの1109の合計14点である。これによると3類と6類が共伴していることが分かる。また6類が集中している部分と1・2・3類が集中している部分がある(第724図)。以上のことから7～8世紀代の一群と8世紀後半～9世紀の一群に分かれる可能性がある。これは報告書第5章第3節で考えたように、前田東・中村遺跡付近に7世紀後半と8世紀後半に寺院が建立あるいは再建されたとした時期と一致しているのも偶然ではないと思われる。

(6) 斎串の機能

斎串は形態的に見ると、上端部や側縁部の形態は様々であるが、下端部は剣先状・圭頭状・鉛筆の芯先状などと形態は異なるものの様に先を尖らせるということでは一致している。この下端部を尖らすということに斎串の使用方法が反映しているものと思われる。そしてその使用方法とは突き刺すということであろう。突き刺し易くするために下端部を尖らせたと考えられる。すでに説かれているように斎串を地面に突き刺し空間を作り出し、その空間は結界を表していると考えられている⁽¹⁸⁾。斎串により外部の悪気を遮断し内部に神聖な空間を作り出すのである。また斎串は人形とともに出土する例が多い。この場合、人形にはそれに息を吹きかけたり、撫でたりすることで穢や罪を祓い流す役目があるとされているので、その人形に乗り移った穢や罪が外部に広がらないようにする役目を斎串は果たしていたものと思われる。

斎串はまた井戸からも出土することが多い⁽¹⁹⁾。出土状況は1：井戸構築時、2：井戸使用時、3：井戸廃棄時がある。1の場合はその場所や水を清めたりするものと考えられる。2の場合は井戸そのものが祭祀の場所であった、あるいは井戸神を祭ったと思われる。3は井戸廃棄時に井戸神を鎮めるためと思われる。中世の井戸の底部に竹を突き刺すことはこの斎串の使用例と同じと言えよう。前田東・中村遺跡ではE区SE02の底から藁束、桃の種、稲粃とともに斎串と考えられるものが1点出土している。これは1の場合に相当する。この井戸は最下層の遺物が10世紀前後で、斎串は下端部の破片であるが側縁に三角形の切り欠きを施す大型のものである。香川県内で井戸から出土した例はまだ前田東・中村

遺跡しかないが、今後増加するものと思われる。

（７）律令制祭祀と祓所

斎串や人形などの木製模造品は律令制祭祀の反映と考えられている。律令制祭祀とは『大宝令』の神祇式で制定された国家的祭祀で、その中で6月と12月の晦日に行われた大祓が最も規模が大きく重要なものであった。これらの律令制祭祀の具体的内容は10世紀の成立した『延喜式』から類推できる。この大祓に関する遺物は平城宮の壬生門の調査など⁽²⁰⁾で出土している。平安時代では平安宮で毎月あるいは臨時に行った七瀬の祓がある。このように国家的祭祀である律令制祭祀に伴って斎串や人形などの木製模造品が多く出土する。律令制祭祀の祭祀具といえる木製模造品類が宮都以外の地方で出土するということは、国家の地方出先機関である国衙やそれに準ずる公的機関を通して律令制祭祀が浸透した結果と言えよう。

このような祭祀が行われた場所を祓所というが、多くの場合は祭祀の後に水に流した状態での遺物の出土が大多数である。祭祀を行いそのまま木製模造品を水に流すことから実際の祭祀場は遺物出土地点のすぐ近くにあるものと考えられる。水に流すという行為も祭祀に含まれることから多数の木製模造品が出土した場所、主に旧河道も含めて祓所と言えよう。祓所そのものは斎串と人形を入れた壺と甕の周囲に、斎串・馬形・刀形が出土した山形県俵田遺跡⁽²¹⁾が有名である。人形の周囲を斎串と馬形で囲んでいる状況が分かるものがある。その他に兵庫県出石町砂入遺跡⁽²²⁾、同袴狭遺跡⁽²³⁾から数万点に及ぶ木製模造品が出土しており、祓所の状況も良好な状態で確認されており注目されている。

前田東・中村遺跡では木製模造品の他に多量の瓦、帯金具、墨書土器などが出土しており、付近に公的施設があったことが十分に予想される。前田東・中村遺跡G区SR04はこのような公的施設に伴う祓所と考えられよう。下川津遺跡、金蔵寺下所遺跡もまたこうした祓所の可能性が高く、香川県においても律令制祭祀が浸透していたことが分かるのである。香川県ではまだ国衙は推定地にとどまり関連する明確な遺構・遺物は発見されていない。郡衙はまだ発見されていない。今後、多量の木製模造品が出土する祓所の付近に公的施設が発見される可能性が高い。

以上、本稿では前田東・中村遺跡例を中心として香川県内出土の斎串について検討してきた。他地域の例はあまり触れることが出来なかったが、今後はさらに詳しく他地域の諸例を検討し、他の木製模造品も含めて考えてゆきたい。

| | 斎 串 | 人 形 | 舟 形 | 刀 形 | 刀子 形 | 馬 形 | 鳥 形 | 備 考 |
|----------|--------|--------|--------|--------|---------|--------|--------|--------|
| 前田東・中村遺跡 | ○ | ○ | | ○ | | | | |
| 下川津遺跡 | ○ | ○ | ○ | | ○ | ○ | ○ | |
| 金蔵寺下所遺跡 | ○ | ○ | ○ | ○ | | ○ | | |
| 郡家原遺跡 | ○ | | | | | | | |
| 郡家大林上遺跡 | ○ | | | | | | | |
| 太田下・須川遺跡 | ○ | ○ | | | | | | |
| 中間西井坪遺跡 | ○ | ○ | | | | | | ※ |
| 鴨部・川田遺跡 | ○ | | | | | | | ※ |
| 多肥松林遺跡 | ○ | | | | | | | ※ |

第11表 香川県内木製模造品出土一覧

※ 現段階で未整理なので今後変更の可能性有り

註

- (1) 藤好史郎・西村尋文・大久保徹也『瀬戸大橋建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告Ⅶ 下川津遺跡』香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター 1990
- (2) 廣瀬常雄『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第10冊 金蔵寺下所遺跡』香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター 1994
- (3) 真鍋昌宏・岡 敦憲・山下平重『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第13冊 郡家原遺跡』香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター 1993
- (4) 北山健一郎・森下友子『高松東道路建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第4冊 太田下・須川遺跡』香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター1994
太田下・須川遺跡に関しては、北山健一郎氏に御教示を得た。
- (5) 廣瀬常雄『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査報告 第17冊 郡家大林上遺跡』香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター 1994
郡家大林上遺跡に関しては、廣瀬常雄氏・木下晴一氏に御教示を得た。
- (6) 蔵本晋司「中間西井坪遺跡」『四国横断自動車道建設に伴う埋蔵文化財発掘調査概

報 平成元年度』香川県教育委員会・(財)香川県埋蔵文化財調査センター 1990
中間西井坪遺跡に関しては蔵本晋司氏に御教示を得た。

- (7) 平成2・3年度に(財)香川県埋蔵文化財調査センターが発掘調査を行なった。
斎串は平成2年度の調査で出土した。筆者が調査担当した。
- (8) 平成5年度に(財)香川県埋蔵文化財調査センターが発掘調査を行なった。遺物実見に
際しては調査担当者の宮崎哲治氏に御世話になり御教示を得た。
- (9) 『木器集成図録 近畿古代篇』奈良国立文化財研究所 1985
- (10) 河瀬信幸他「杉垣内遺跡」『昭和61年度農業基盤整備事業地域埋蔵文化財発掘調査
報告Ⅰ』三重県教育委員会 1989
- (11) 佐藤達雄・寺田甲子郎・中山正典・竹山喜章『大谷川Ⅳ』財団法人静岡県埋蔵文化
財調査研究所 1989
- (12) 『平城宮発掘調査報告Ⅳ』奈良国立文化財研究所 1975
- (13) 吉川義彦他『平安京跡発掘調査報告 左京四条一坊』平安京調査会 1975
- (14) 『平城宮発掘調査報告Ⅻ』奈良国立文化財研究所 1985
- (15) 西崎卓哉・中井公他『平城京左京(外京)五条五坊七・十坪発掘調査概要報告』
奈良市教育委員会 1982
- (16) 中井一夫・松田真一『和爾・森本遺跡』奈良県立橿原考古学研究所編 1983
- (17) 黒崎 直「斎串考」『古代研究』10号 1976
- (18) 金子裕之「平城京と祭場」『国立歴史民俗博物館研究報告』第7集 1985
- (19) 井戸出土の斎串については次の論考がある。
兼康保明「井戸における斎串使用の一例 滋賀県高島郡高島町鴨遺跡の井戸」
『古代研究』19号 1980
- (20) 「南面東門(壬生門)の調査」『昭和55年度 平城宮跡発掘調査部発掘調査概報』
奈良国立文化財研究所 1981
- (21) 佐藤庄一・安部 実『倭田遺跡第2次発掘調査報告書』山形県教育委員会 1984
- (22) 渡辺 昇「砂入遺跡」『兵庫県史 考古資料編』兵庫県 1992
渡辺 昇「兵庫県出石郡出石町砂入遺跡」『日本考古学年報42』日本考古学協会1991
『砂入遺跡現地説明会資料』兵庫県埋蔵文化財調査事務所 1990
- (23) 『袴狭遺跡遺物説明会資料』兵庫県教育委員会 1991
『出石町史』第4巻資料編Ⅱ 出石町 1993